

平成30年(2018年)11月14日(水曜日)

湧水

12月の三島市長選

任期満了に伴う三島市長選(12月9日告示、16日投開票)まで1カ月。現在までに現職と新人の計3氏が出馬表明している。選挙は共通課題の多い伊豆半島のまとめ役を、選ぶ重要な意義があり、単に11万人都市の顔を決めるだけではないことを意識したい。

まず観光面で伊豆地域は2019年にJR各社による大型観光企画(DC)が、20年に東京五輪が行われる。各地で誘客合戦が熾烈(しれつ)化する中、ビッグイベントの相次ぐ開催は大変な幸運で、リピーター客を呼び込めるかが鍵。三島は伊豆7市6町で最も人口が多く、市長は県観光協会の副会長(会長は知事)や美しい伊豆創造センターの会長を兼ねる。責任は明確だ。

玄関口であるJR三島駅の利便性改善は早急に検討したいところ。利用者が多く通る新幹線口と南口改札間は距離がある上に下りエスカレーターがなく、評判が良くない。以前、知人女性のSNSが目にとまった。南口の近くに住む彼女だが、

選ぶのは伊豆のリーダー

海外から帰国した際、「この重い荷物で階段は降りられない」と徒歩移動を諦め、北口からタクシーで帰ったというのだ。書き込みには同調するコメントが相次いだ。

構内施設の見直しについては鉄道事業者の姿勢を指摘するそもそも論があるが、行政も周辺自治体を巻き込んで機運を高める努力が欠かせない。

直面する人口減少は当然、最も取り組むべきテーマの一つに挙がる。比較的にぎわいのある三島も含め、若者と女性の流出、産業の維持は共通課題。伊豆南部の状況の深刻さや消滅可能性都市の危機感を一体的に共有し、個別に訴えていた声を伊豆の総意として国や県に働き掛ける必要性は増す一方だ。

「伊豆は一つ」という合言葉が叫ばれて久しいが、真の連携は取れずに来た。「結局、伊豆は一つ一つ」という皮肉が実態を表している。首長を束ねる調整力、自ら仕掛けを提案し、売り込む発想力や営業力。三島以外の住民もどんな資質を持った人がリーダー候補か、注目してほしい。

(三島支局・河村英之)